氏　　名	**CHENG ZHEN**（テイ シン）
学 位 の 種 類	博士（環境形成）
学 位 記 番 号	博第 48 号
学 位 授 与 日	2025 年 3 月 14 日
学位授与の要件	学位規則第３条第１項第３号該当
論　文　題　目	**元青花における視覚文化の研究** **ー「至正十一年銘龍文瓶」を中心にー**
審　査　委　員	主査　武蔵野美術大学　教授　　寺山 祐策
	副査　武蔵野美術大学　教授　　木田 拓也
	副査　武蔵野美術大学　教授　　奥　 健夫
	副査　武蔵野美術大学　教授　　大田 暁雄

内　容　の　要　旨

現在ロンドンの大英博物館に収蔵されている元青花の「至正十一年銘龍文瓶」（1351）については、元青花の基準作とされ、アレキサンダー・ポープによる研究など、これまでにもさまざまな検討が重ねられ、元青花の概念形成において重要な役割を果たしてきた。

本研究は、「至正十一年銘龍文瓶」を巡って、視覚伝達デザインの視点から、その銘文、文様、器形など、作品そのものから読み取ることができる視覚的情報を手がかりとして、本作を寄進した発注者側の視点から、この瓶が制作された元代における思想、社会、宗教との関係などについて解読を試み、元代の中国の江南地方における青花磁器を取り巻く文化的状況について探りたい。

「至正十一年銘龍文瓶」の長大な器面には８つの文様帯が設けられ、それぞれに異なる文様で飾られている。この作品で最も重要なのは、瓶の頸部に書かれている長い銘文である。「至正十一年」（1351）という紀年銘が記されていることから、この一対の瓶は元青花研究の出発点と見なされてきた。銘文には寄進者、祭祀の目的、使用された場所などの具体的な情報が記録されていることから、「至正十一年銘龍文瓶」は、時間、空間、人物に関する貴重な情報を含む唯一の元青花となっている。至正十一年（1351）は、元朝末期の重要な時期であり、景德鎮の磁器生産地は戦乱の脅威に直面していた。この緊迫した歴史的背景の中で、張文進という人物がこの一対の瓶と一つの香炉を注文し寄進したことが銘文から分かる。その後数百年が経過し、同時に寄進された香炉は失われたが、この一対の瓶はほぼ完全な状態で保存されてきた。この銘文から、この一対の瓶の誕生が宗教的な目的と密接に関連していたのではないかと考えれる。

寄進者である張文進はなぜ元青花の「至正十一年銘龍文瓶」を注文したのか、景德鎮の

陶工たちはこの瓶を製作する際、寄進者の宗教的要求を満たすために技術的および審美的にどのように考えたのか、さらに、この一対の瓶が儀礼の空間に置かれたとき、張文進にとってどのような意味があったのか。これらの課題を解決するために、「至正十一年銘龍文瓶」そのものだけでなく、元代の思想および社会との関係を考察する必要がある。この一対の瓶の銘文が重要な手がかりを提供している。

本研究は広範囲な資料収集を基に、四つの部分に分けて詳細な分析が行われている。まずは、「至正十一年銘龍文瓶」の銘文に焦点を当て、この一対の瓶が制作された歴史的背景と注文者の動機を解明する。次に、瓶の文様を分析し、これらの文様がどのようにして制作者の信仰と当時の美意識を反映しているかを探求し、特に主文様の源泉と意味を掘り下げ、元代の絵画や宗教との関連性を詳述している。そして、元青花の制作技術とその器形の意味について研究し、制作者が青銅器の器形を採用することで、当時の儀礼規範と宗教的需要にどのように適応していたかを検討する。また、同時に制作されたが現存しない香炉の可能性について推測し、セットになる元青花器物を再構築しようと試みる。最後では、星源祖殿の儀式空間を再構築し、「至正十一年銘龍文瓶」と香炉が視覚的および儀式的な文脈でどのように機能していたかを検証する。この分析を通じて、信徒がこの一式の器物を用いてどのように神様とコミュニケーションを取り、そして彼の精神的需要がどのように満たされていたかを考察する。

総じて、本研究は「至正十一年銘龍文瓶」の多角的な分析を通じて、元代の社会と宗教におけるその重要な役割を明らかにした。本研究において、元青花が視覚的美と宗教的儀式の両方で果たす役割を強調し、信仰におけるコミュニケーションの媒介としての位置を確認する。星源祖殿での儀礼空間の再現は、実際の使用状況における神様との交流を証明し、元代の人々の精神世界を反映するものである。これにより、元代の社会文化への理解が深まるとともに、視覚伝達デザインの理論と実践に新たな視点を提供する。

審　査　結　果　の　要　旨

【論文の概要】

本研究は、中国元代の青花磁器の中で唯一、制作年代（1351 年）、寄進者（張文進）、寄進対象（胡浄一元帥）、寄進された場所（星源祖殿）が明確な一対の「至正十一年銘龍文瓶」（大英博物館収蔵）を対象としている。この器物の制作年が 20 世紀前半に特定されたことにより、元青花様式が確立されることになった極めて重要な器物である。

本研究では、そこに刻まれた銘文や文様、器形などの視覚的情報を一次情報とし、徹底した文献資料収集を基に発注者の意図や制作当時の社会状況、宗教との関係を解読し、景徳鎮窯など江南地方における青花磁器を取り巻く文化的・社会的状況を従来の陶磁史研究に加えて視覚伝達デザインの観点から明らかにすることを目的としている。

第一章の銘文の分析と考察では、奉納者の本籍、奉納された祭祀空間である星源祖殿と

は何か、捧げられた神である胡浄一元帥はどのような神であったかなど、丁寧な文献調査を経て、これまでの先行研究にはない新たな知見も含めてその宗教的・社会的背景を詳述している。

第二章の文様についての分析では、分割された文様帯の視覚的意味を読み解き、その象徴性が検討されている。特に主紋様とも言える龍文と鳳凰文、波濤文については絵画史における龍画との影響関係、道教における意味などとの関係を詳述し、また当時の美術潮流と景徳鎮窯の職人たちとの影響関係などが考察されている。それらの分析を前提に寄進者の信仰と祈願の意図を、著者独自の視点から推測を試みている。

第三章では器形の製造背景を探り、失われた香炉を考証により復元描写している。ここでは本作の形状が宋代における復興運動の影響下（古代青銅器スタイルのリバイバル）にあること、当時の景徳鎮窯の高度な製造技術や文化的背景と関連づけて考察されている。また失われた香炉について、これまでに出土した香炉に基づき、形状や装飾を推測し復元を試みている。

第四章では「至正十一年銘龍文瓶」が置かれた空間について、寄進物が置かれた霊順廟（星源祖殿）の空間構成を、数少ない現存資料に基づき再構築を試みている。当時描かれた図像などを参照することで祭礼の様子を推測し、「至正十一年銘龍文瓶」と香炉セットが寄進者の神への祈りと、神からの応答の媒介として機能したのではないかという推測が述べられている。

本研究は、一対の瓶「至正十一年銘龍文瓶」を通して視覚言語の理論と実践に新たな視点を提供している、その多角的な分析と解釈を通して、対象の美術的価値だけでなく、宗教儀礼における役割、信仰の媒介（コミュニケーションのメディア）としての意義が語られている。対象の解釈を起点に、それを発注した人間、制作された工房、置かれた儀礼空間の再現などによって、元代末の精神世界や社会文化、物と人間の環境全体の連関を示している。

【審査の概要】

公聴会は 2025 年 1 月 25 日（土）14 時より本学鷹の台キャンパスの 9 号館 311 教室において多くの聴衆を集め、対面と Zoom を併用して行われた。年表と造本された論文も同時に展示された。1 時間ほどの発表を受けて後、活発な質疑応答が行われた。

その後、提出された申請論文に対する審査委員会が鷹の台キャンパス（9 号館 306）にて厳正に開催された。

【審査の結果報告】

最初に前回の予備論文で指摘された問題が正しく修正されているかの確認が行われた。その主な点は、工房での制作プロセスや神と寄進者の心情的な関係について、書き方に曖昧な部分が指摘されていた。描かれた龍および鳳凰の形について、宋代に形成された龍造

形パターンや道教文化の影響について断言できるのかという点。星源祖殿の復元に関して断定と推論の書き方に注意する必要である点などであった。

それらについて以下、意見が述べられた。日本語表現や参考文献の整理が改善されたことで、論文の論理性と完成度が向上している。これまであった断定的な表現が適切に修正され、説得力および内容の厚みが増している。龍文と鳳凰文に関する記述が充実し、全体のバランスが改善され、推論が抑制されたことで学術的な質が向上している。予備論文において指摘された問題点が適切に修正され、内容の精度や論理性が向上したと評価された。

次に論文全体の価値について検討がなされた。

工芸史研究では個々の作品に焦点を当てた分析が難しいとされる中、本論文は特定の作品を軸にしながらも、対象器物の造形的観点のみならず、寄進者、制作工房、寄進対象に関する宗教、文化状況、寄進された空間と儀礼内容の推測など、多角的重層的な観点から研究を進めたことが特徴であり、素晴らしい点であることが評価された。論文における推論には一定の危うさが伴うが、本論文における時代の文化的背景を丁寧に読み解く姿勢がむしろ評価され、それがともすれば保守的になりがちな従来の陶磁研究とは異なる新たな可能性を持っている点、その意義が高く評価された。

以上の観点から、本論文は博士論文としてふさわしい水準に達しており、審査員から合格が認められ審査を終了した。

〈目次〉

序章
第一章　「至正十一年銘龍文瓶」の銘文についての考察
1.「至正十一年銘龍文瓶」の銘文に関する先行研究
2. 陶磁器における銘文の特徴
3.「至正十一年銘龍文瓶」の銘文のレイアウト
4.「至正十一年銘龍文瓶」の銘文の内容についての分析
4.1.奉納者とその本籍地「信州路玉山県順城郷徳教里荊塘社、奉聖弟子張文進」
4.2.祭祀空間「星源祖殿」
4.3.捧げられる神「胡浄一元帥」
4.3.1.「胡浄一元帥」に関する記述
4.3.2.「胡浄一元帥」に関する元代の二回の賜号
4.4.奉納の日付「至正十一年、四月良辰」・「四月吉日」
4.5.願望「祈保、合家清吉、子女平安」
5.小結

第二章　「至正十一年銘龍文瓶」の文様についての分析
1.「至正十一年銘龍文瓶」の文様に関する先行研究
2.「至正十一年銘龍文瓶」の文様のデザイン
2.1.「至正十一年銘龍文瓶」の文様の特徴
2.2.「至正十一年銘龍文瓶」の文様帯の配置と視覚的意味
3. 元青花の龍文に関する分析
3.1. 元代以前の陶磁器における龍文の特徴
3.2. 元青花の龍文の特徴
3.2.1. 元青花の龍文の描き方
3.2.2. 元青花の龍文の添景物
3.2.3. 元青花の龍の動態の表現
3.3. 元青花の龍文と絵画の影響関係
3.3.1. 龍画の現れ
3.3.2. 宋代における龍画の流行
3.3.3. 元代の道教集団における龍画
3.4. 元青花の波濤文についての考察
4. 元青花の鳳凰文に関する分析
4.1. 歴代鳳凰文の特徴と意味性の考察
4.1.1. 文献に記述された鳳凰
4.1.2. 戦国から漢代にかけて陶磁器における鳳凰文
4.1.3. 唐代の陶磁器における鳳凰文
4.1.4. 宋代の陶磁器における鳳凰文
4.2. 元青花の鳳凰文の特徴
5. 元代景徳鎮陶磁工房の考察
5.1. 商品としての元青花
5.2. 祭祀用の注文品としての元青花
6. 小結

第三章　「至正十一年銘龍文瓶」の器形についての分析
1.「至正十一年銘龍文瓶」の器形に関する先行研究
2.「至正十一年銘龍文瓶」の制作とデザインコンセプト
2.1.「至正十一年銘龍文瓶」の制作についての分析
2.2.「至正十一年銘龍文瓶」のデザインコンセプト
2.2.1. 宋代の器物復興運動の影響
2.2.2. 長大な獣耳不遊環瓶についての考察
3.香炉についての推測
3.1.器形

3.2.サイズ
3.3.文様
4.張文進が元青花という媒介を選んだ理由
5.小結

第四章　「至正十一年銘龍文瓶」が置かれた空間についての推測
1.儀礼空間についての推測
1.1. 霊順廟（星源祖殿）の建築
1.2. 霊順廟（星源祖殿）の空間装飾
1.3. 殿内の神像とその配置
2.旧暦 4 月 8 日に霊順廟で行われる祭りの推測
2.1. 宋元時代における民間祠廟の祭りについての考察
2.2.「上善無碍大斎」の流れの推測
2.3. 斎壇の形式について
3. 3 点セットの元青花器物の使用
3.1.「至正十一年銘龍文瓶」の置き方
3.2. 神々とのコミュニケーション
4.小結

おわりに

図版出典リスト
史料・参考文献一覧